

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381096

研究課題名(和文) 伝承遊びの伝承性の復権に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and Demonstrative Research on Rehabilitation of Handing Down of Japanese Traditional Plays

研究代表者

岩田 遵子 (IWATA, Junko)

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：80269521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本においては、子どもたちの遊びの伝承は市井においては既に消滅してしまっている。しかし、就学前施設において、わらべうた遊びのような伝承遊びが、復権するには、まず第一に保育者が子どもと共にわらべうた遊びを行い、次第にそこから撤退していくことが必要である。それによって、子どもたち自身によるわらべうた遊びの再生が可能となる。第二に、それが年長児から年少児へと伝承されるには、「遊びの徒弟制」と同様の構造があることが必要である。

研究成果の概要(英文)：At kindergartens or nursery schools in Japan, in order for children to come to play spontaneously Japanese traditional plays like ones with warabeuta, which have already disappeared in modern society, childcare workers needs to play with their children at first, and then make themselves fade out from the play. And the structure like 'the apprentice system of play' is required to hand them down from older children to younger children. It leads children to regenerate the traditional plays.

研究分野：教育方法学

キーワード：遊びの伝承 わらべうた遊び 遊びの徒弟制

1. 研究開始当初の背景

(1)社会の近代化と共に市井においては消滅した伝承遊び(わらべうた遊び等)は、近年就学前施設等で大人が子どもに指導するという形で行なわれるようになった。しかし、このような形による伝承遊びの実践は、伝承遊び本来の意義を喪失している。

伝承遊び本来の意義は、①その伝承過程において、遊ぶ動機が子どもの側にある、②ルールを子どもが自ら創出するという規範生成の訓練を行う、という2点である。

(2)(1)のような伝承遊び本来の意義を復権することは市井においては困難である。しかし、教育施設において、遊びの伝承構造を構成することによって可能となるのではないだろうか。

(3)もし、就学前教育施設において遊びの伝承が可能となるとすれば、保育実践において次の3点が理論仮説となりうると考えた。

- ①子ども集団に共同性が濃密に形成されていること。
- ②年長児たちと保育者(教授者としてでなく、遊びのモデルとして)が、いつも一定の時間に同じ場所で楽しくわらべうた遊び等の伝承遊びを行う状態があること。
- ③②の状態を年少児たちが見て憧れることによって(年長児の姿が年少児のモデルとなる)、「見て真似る」ようになること。

2. 研究の目的

就学前施設において伝承遊びが前近代社会におけると同様に年長児から年少児へ伝承される構造と条件(環境構成)及び保育者の役割について明らかにする。具体的には次の3点である。

- (1)子どもたちがわらべうた遊びを楽しく展開し、繰り返し遊ぶための環境条件
- (2)子ども達がわらべうた遊びを持続的に展開するための保育者の役割
- (3)年少児が年長児の遊びを真似たくなるような条件(環境構成、保育者の関与のあり方)

3. 研究の方法

(1)遊びの伝承が自然に行なわれている就学前施設(我孫子市めばえ幼稚園)のフィールドワーク研究

(2)遊びの伝承を意図的に構成する施設におけるアクションリサーチ(研究代表者の助言に基づいて環境構成と実践を行う)

4. 研究成果

(1)自然に遊びが伝承されている就学前施設(めばえ幼稚園)のフィールドワークによって明らかになったこと

めばえ幼稚園では、前近代社会における遊びの伝承構造と同様の構造が、環境やカリキュラムに構造化されている。前近代社会における遊びの伝承構造とは、生活行為において年長児が年少児をケアし(包摂)、その一方で

遊びにおいては、「みそっかす」として年少児を外す(排除)という、「包摂」と「排除」の二重構造によって、年少児が年長児に対する強い憧れを持ち、それによって年少児が年長児を見て真似る、というものである。研究代表者は、このような伝承構造を「遊びの徒弟制」と呼んだ(図1参照)。

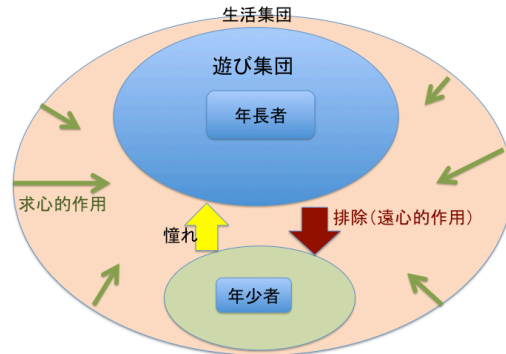


図1 「遊びの徒弟制」における集団の二重構造

めばえ幼稚園において、「遊びの徒弟制」と同様の構造は、以下のような環境やカリキュラムとして構造化されている。

① 環境

1. 保育室の配置—ペアクラスがオープンスペースによって年長児と年中児の「見る—見られる」関係が構成されている
2. 園庭の遊具の配置—一般の園には見られないような大型遊具と他の遊具は「見る—見られる」関係に設置されており、年長児の運動能力の高さを年少児、年中児に見せつけるように作用する。

② カリキュラム

1. 年長児が年少児をケアしたり、動きを共有する行事—斉活動準備の手伝い(4月)、昼食準備の手伝い(5月)、インディアン店開き(6月)、インディアン村開き(7月)、誕生会(各月)、芋掘り遠足(10月)等
2. 年長児が活動の中心に位置し、年少、年中児が周辺化される行事—インディアン店開き(6月)、お別れ会(3月)、ドッジボール大会(3月)、誕生会製作(各月)

③ 保育者の援助方針

大人の関与によるよりも、「遊びの徒弟制」と同様の集団の二重構造(前述)を支えることによって、子ども同士が関わり、そこで子どもが学ぶことを極力尊重する。

以上を図示すると図2のようになる。めばえ幼稚園では、この構造によって、年長児から年少児へと遊びが伝承されていると考えられる(研究目的の(3)が明らかになった)。

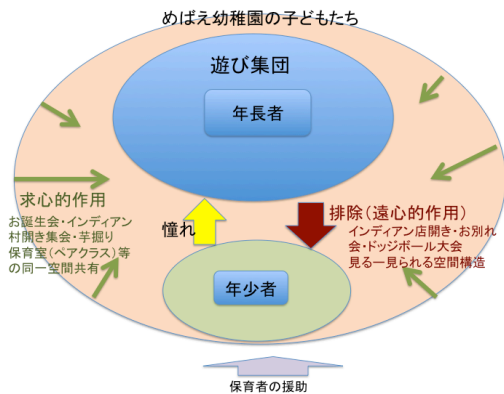


図2 めばえ幼稚園の「遊びの徒弟制」の構造

(2)遊びの伝承を代表者の助言に基づいて意図的に構成する施設におけるアクションリサーチから明らかになったこと

一般に、現代における日本の就学前施設は近代学校教育制度内にあるがゆえに、めばえ幼稚園のような、環境構成(オープンスペース等)や日常的な異年齢交流カリキュラムは行われない。一クラス30人の子どもに対して担任保育者一人が、一つの保育室で室内の遊びを行い、園庭の遊びも学年ごとに区別される場合が多い。それゆえ、「遊びの徒弟制」のような二重構造が形成されるのは、困難である。

このような条件の下で、いかにして年長の遊びを年少児が見て真似るといふ遊びの伝承が可能となるか。このことを伝承遊びと呼ばれるもののうち、わらべうた遊びを中心にアクションリサーチを行った。

まず明らかにされるべきは、子どもたちが自発的にわらべうた遊びを楽しく展開し、繰り返し遊ぶための環境条件(研究目的(1))と、子ども達がわらべうた遊びを自発的にかつ持続的に展開するための保育者の役割(研究目的(2))であり、以下4点を明らかにした。

①ノリ(リズム)の共有度の高いクラス集団が形成されていること(そのためには、一斉活動において手遊び等の音楽的活動が重要である)。

②①のクラス集団で保育者が子どもたちと一定期間、できるだけ毎日わらべうた遊びを行うことによって、子どもたちの間にわらべうた遊びの集合的記憶が蓄積されること。

③次第に子どもたちが自発的にわらべうた遊びを行う姿が見られるようになるが、再生されるのは、わらべうた遊びの断片であることが多い。その際、保育者は介入することによってノリの共同生成の担い手となる必要がある。

④子どもたちのみでわらべうた遊びのノリを共同に生成できるようになってきたら、それを見取って、保育者は次第に共同生成から撤

退していくことが必要である。

以上の①～④によって、子どもたちが保育者からは半ば自立的に自分たちでわらべうた遊びのノリを再生するようになる姿が見られるようになるという事実を、アクションリサーチを行った2つの園(浦安市公立幼稚園と私立認定こども園あかみ幼稚園)で確認している。

このような年長児のわらべうた遊びを見て、年中児や年少児が見て真似るような環境を構成するには、包摂と排除の構造をどのように園の中に構造化するかが問題となり、それについては今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

①岩田遵子、小川博久、教育実践における正統的周辺参加の実現可能性—私立めばえ幼稚園のフィールドワークを通して—、東京都市大学人間科学部紀要、査読無し、第7号、2016、pp. 15～43

②岩田遵子、わらべうた遊び観の近代的変貌—現代における遊びの非伝承性—、東京都市大学共通教育部紀要、査読無し、第8号、2015、pp. 115～129

③岩田遵子、小川博久、近代教育制度における教職実践の一方性克服の試み—保育者のふるまいへの提案、東京都市大学人間科学部紀要、査読無し、第6号、2015 pp. 11～33

④岩田遵子、小川博久、主体的学習におけるパフォーマンスと意味生成の関連性—国語科における朗読の実践を中心として—、東京都市大学共通教育部紀要、査読無し、第7号、2014、pp. 91～100

⑤岩田遵子、保育実践研究としてのエスノグラフィにおける「フィールド」とは何か(2)—遊びに対する保育者の潜在的関係性—、東京都市大学人間科学部紀要、査読無し、第5号、2014、pp. 19～31

[学会発表](計 9件)

①岩田遵子、小川博久、現代学校教育システムの分業化論理の克服は可能か(3)—私立めばえ幼稚園における通過儀礼としてのお誕生会の分析を通して—、日本教育方法学会第51回大会、2015年10月11日、岩手大学(岩手県盛岡市)

②岩田遵子、保育実践における手遊びの意義—「保育文化」としての重要性—、日本保育学会第69回大会、2015年5月10日、椋山学園大学(愛知県名古屋)

③岩田遵子、小川博久、現代学校教育システムの分業化の論理の克服は可能か—私立めばえ幼稚園のフィールドワークを通して—、日

本教育方法学会第 50 回記念大会、2014 年 10 月 12 日、広島大学（広島県広島市）

④泉澤文子、能登理沙、岩田遵子、小川博久、自発性と仲間意識の形成におけるわらべうた遊びの意義(1)、日本保育学会第 67 回大会、2014 年 5 月 18 日、大阪総合保育大学（大阪府大阪市）

⑤岩田遵子、小川博久、泉澤文子、能登理沙、自発性と仲間意識の形成におけるわらべうた遊びの意義(2)

、日本保育学会第 67 回大会、2014 年 5 月 18 日、大阪総合保育大学（大阪府大阪市）

⑥岩田遵子、小川博久、近代教育制度における教職実践の一方向性克服の試み—保育者のふるまいへの提案、日本教育方法学会第 49 回大会、2013 年 10 月 7 日、埼玉大学（埼玉県さいたま市）

⑦岩田遵子、わらべうた遊び観の近代的変貌—現代における遊びの非伝承性—日本保育学会第 66 回大会、2013 年 5 月 10 日、中村学園大学（福岡県福岡市）

⑧岩田遵子、小川博久、泉澤文子、能登理沙、伝承遊びの再生はいかにして可能か(1)、日本保育学会第 66 回大会、2013 年 5 月 11 日、中村学園大学（福岡県福岡市）

⑨能登理沙、泉澤文子、岩田遵子、小川博久、伝承遊びの再生はいかにして可能か(2)、日本保育学会第 66 回大会、2013 年 5 月 11 日、中村学園大学（福岡県福岡市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田遵子（IWATA Junko）

東京都市大学人間科学部 教授

研究者番号：80269521